

まほろば【校長室だより】

[文責]

校長 江口 尋信

子どもたちの読書活動

本年度の重点取組の一つとして、子どもたちの読書活動を推進しています。年度当初、学校図書館に司書の先生が配置されず、図書館の開放が遅れたのですが、長谷佐織先生が赴任してくださったことで、図書館が通常どおり稼働するようになりました。

実は、全国学力・学習状況調査（質問紙）の結果、本校の課題の一つとして、本を読むことが好きな児童の割合が低い傾向にあることが分かりました。動画の視聴やSNS、ゲームなどにかかる時間は長い傾向にあるのですが、本を手にとって読むことが少ないようです。そこで、本年度は、「1・2年生－100冊、3・4年生－90冊、3・4年生－70冊」という数字目標を立て、「多読」に取り組むことにしました。そして、先日、3年生の〇〇〇〇さんが90冊を達成しました。達成者第1号として放送で紹介し、校長室で達成証のカードを渡しました。これから、少しずつ目標冊数を達成した子どもたちが増えてくるのではないかと期待しています。

人工知能のエンジニアであり、「脳」のスペシャリストである黒川伊保子さんは、読書の意味を次のように述べています。「読書は、脳に、日常生活では手にできない、豊かな体験を与えてくれる。子どもたちの脳にとって読書は、日常体験とそう変わらずに、脳に知識化されていく「仮想体験」なのである。」「本の中の出来事は、子どもたちの脳にしてみたら、あたかも自分が体験したことのように知恵やセンスの源になっていく。」

達成証を持つ〇〇さん

「多読」の他にも、市民図書館から廃棄される児童用図書をいただき教室に置いたり、市民図書館の貸し出しカードを作る手続きを学校で行ったりするなどの取組も行っています。さらに、B時制ではない日のプラムタイムに読書ができるようにしたり、本の読み聞かせなどを行ったりすることも考えています。これらの取組が、本を手取るきっかけになればいいなと考えています。

この取組で気を付けなければならないことがあります。7月4日の学校運営協議会で、筑紫女学園大学の原会長からご指摘を受けましたが、子どもの特性として、自分が好きな本を繰り返し読むことを好む子どももいるので、同じ本を読んでも冊数として「2、3、4・・・」とカウントしてほしいという助言をいただきました。なるほど、そうかと納得しました。こちらの思いを押し付けないよう気を付けたいと思います。

前期前半が終わります

前期前半が終わり、今週末から夏休みが始まります。4月から約70日の学校生活でしたが、保護者の皆様には大変お世話になりました。サポーターとして学校の教育活動を側面から支えていただいたことに感謝します。ありがとうございました。